

工場の外は、「ハルピン駅から逃亡した日本兵がいる」との情報で「日本兵狩り」が強行されていて、一步も外へ出られません。お葬式も、埋葬も出来ません。お経が出来る方に枕経を読んで頂き、中国人に頼んで連れて行ってもらったのです。

毎日、ソ連兵が銃を構えて押し入ってきます。みんなの時計は、兵隊の両腕にぐるぐると巻かれています。万年筆は、初めて見るのか、恐る恐る指で転がしては眺めています。

「爆弾と間違えているのかしら」とか「囚人部隊かしら」などと話題を提供してくれました。

男の人は、パンツの中まで調べられました。女、子どもには手を出しません。が、おしめカバーの中に日本円札を縫い込んでいました。

#### ▽避難生活

私たち家族は、二畳の部屋に親子七人、足と頭を互い違いに寝ていました。次女を失って六人になりましたが……。ほかの人たちは、板敷きの部屋に雑魚寝をしていました。

工場の敷地内には寮があり、衣類や布団類もそのままになっていました。布団類を皆で頂いて薄い敷布団を作り、掛け布団の綿で冬の綿入れを作りました。冬の準備もしなければ、八月に着て出た夏物一枚で、心細いものでした。

十一月になり、お世話して下さいいた中国人が（日本人の世話をしている）と通報されて、銃殺されてしまいました。食糧の道も絶たれてしまい、不安は募るばかりでした。急にソ連兵が入って来て、私たちは身体検査をされました。主人は、

慣れぬ土地のため地図を持っていたのを、スパイと間違われ、軽機関銃を構えたソ連兵に前後左右を取り囲まれて、連れて行かれました。

皆、生きた心地もなく、途方に暮れてしまいました。来るべき時が来たと思っても、手のほどこしようもありません。男の人は六人だけで、地理にも不案内でオロオロされるだけです。不安で眠れません。

ところが夜中の二時ごろに主人が、ひよっこり帰って来ました。

「銃殺の前に『小便をさせて欲しい』と頼んで外に出たところへ、日本語の分かる中国人が通りかかり、事情を話して通訳してもらい、釈放された」とのことでした。

食糧の道も絶たれ、逃げた日本兵を追って毎日「日本兵狩り」が激しくなる一方でした。このまま冬を迎